

原油市況

原油価格は、国際商品市況が下落基調にあるなか、調整気味に推移している。6月23日にはWTI(期近物、終値)が1バレル=70.87ドルとなり、4月21日に付けた史上最高値75.17ドルよりも6%ほど低い水準となった。しかし、銅など非鉄金属がピーク時に比べ18%下落したのに比べると下落幅は小さく、原油相場は底堅く推移しているとみられる。イラン核開発問題の先行き不安やナイジェリアでの武装勢力による石油精製施設への攻撃を背景とした供給不安が根強いほか、米国製油所の稼働率上昇や米ガソリン在庫の増加からこのところは緩和気味であるものの、米国の需要期を控えガソリン需給が逼迫することへの懸念も続いている。当面はイラン情勢のほか、中国・インドなど新興国の高成長が持続していることもあり、原油価格の高止まりが予想される。

米国経済

米国では、景気拡大が続いている。06年1~3月の実質GDP(改定値)は前期比年率+5.3%と、速報値の同4.8%から上方修正された。06年6月調査によれば米国エコノミストは、今後も3%前後の成長が続くものの、年後半には利上げの影響が浸透し始め、伸び率が緩やかに弱まると見込んでいる。一方、米政策金利は5月10日に0.25%引き上げられ5.00%になり、次回6月29日も利上げされる見通し。ただし2年続いた利上げは最終局面に近づきつつある。米長期金利は6月下旬に5.2%台に小幅上昇して推移している。

国内経済

わが国では06年1~3月期の実質GDP成長率(2次速報)が前期比+0.8%(年率換算+3.1%)と、1次速報から0.3ポイント(年率で1.2ポイント)大幅に上方修正された。個人消費、住宅投資が増加し、民需中心に回復が継続している。足下4月の鉱工業生産は2ヶ月連続のプラスとなり、緩やかに増加している。また雇用・所得環境の改善を背景に消費者マインドも高水準で推移している。一方、設備投資は、需要側統計である法人企業統計季報でみると、1~3月は企業収益の拡大を受け大幅増加。しかし先行指標となる機械受注は4~6月が減少見通し。ただし日銀短観によれば、設備投資計画は大企業中心に06年度も増勢が続く見通しとなっている。

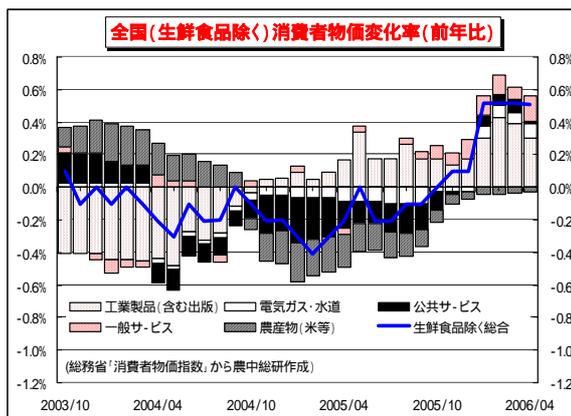
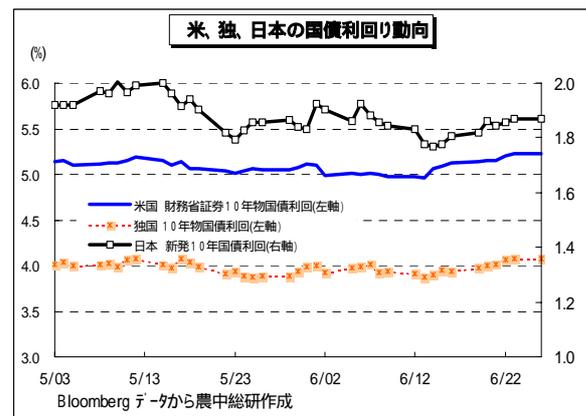
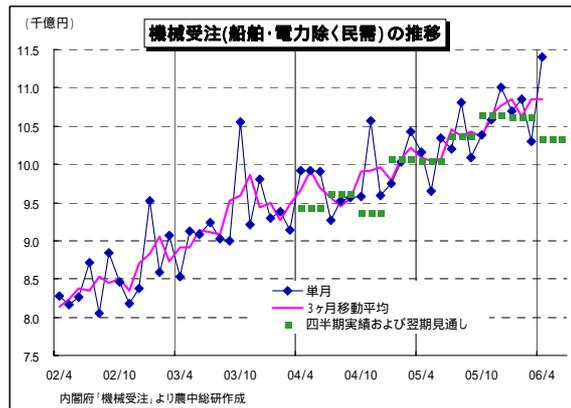
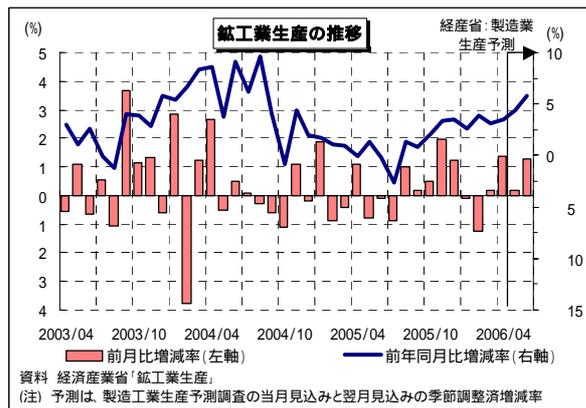
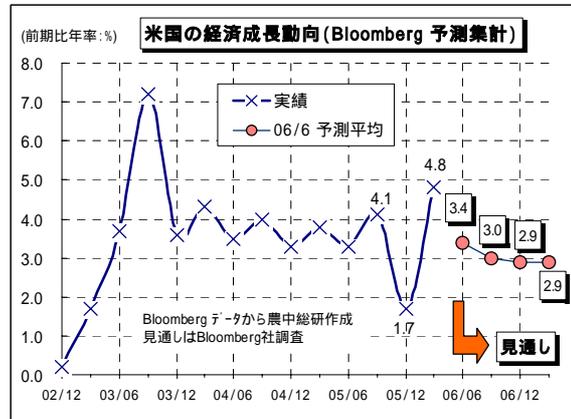
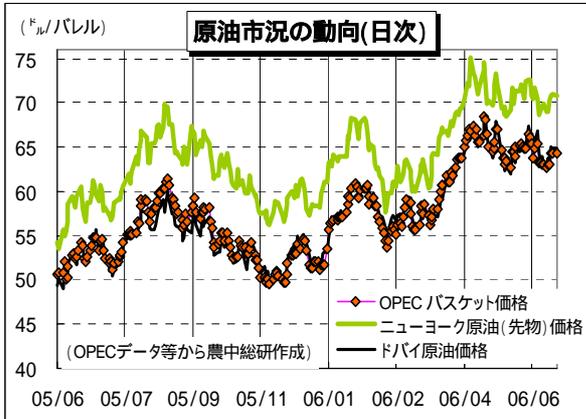
為替・金利・株価

外国為替市場では、日米金融政策の先行きに対する思惑からドル高基調が続き、このところは1ドル=115円~116円台で推移している。またユーロ圏の追加利上げ観測の高まりから対ユーロでも円安が進み、円は史上最安値を更新。日本の長期金利の目安である新発10年国債利回りは、日銀の量的緩和政策解除(3月9日)以降上昇し5月中旬に4月中旬以来となる一時2.0%に乗せたが、このところは1.9%台で推移している。一方、4月の消費者物価は6ヶ月連続で前年比プラスとなり、原油高等から先行きもプラス圏で推移する見通し。政府・日銀によるデフレ脱却宣言やゼロ金利政策解除の時期に注目が集まっている。日経平均株価は世界的な株安から6月中旬に14,200円台まで下落した後、持ち直し15,000円台を回復して推移している。

政府・日銀の景況判断

政府は6月の「月例経済報告」で景気判断を「回復している」と4ヶ月連続で据え置き。日銀も6月の景況判断を「着実に回復を続けている」と5ヶ月連続で据え置いた。

内外の経済金融データ



(詳しくは、ホームページ-トピックス-(今月の経済・金融情勢) <http://www.nochuri.co.jp>へ)